

大唐三藏聖教序

太宗文皇帝製

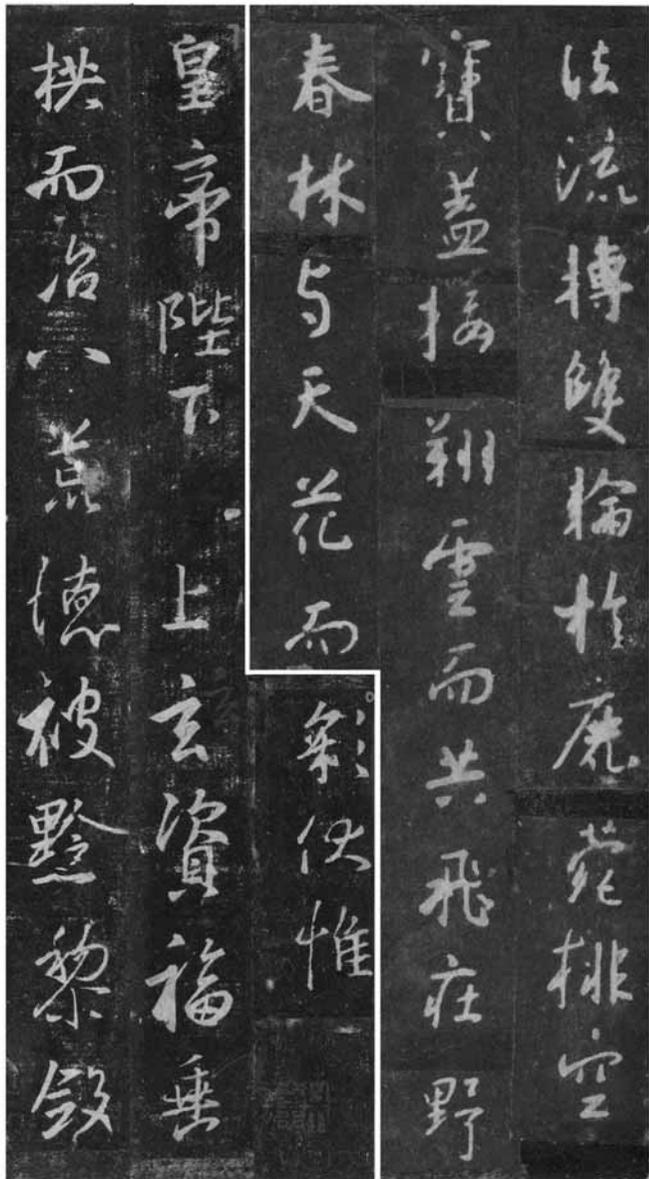
弘福寺沙門懷仁集音右

將軍王羲之書

蓋聞二儀有像顯覆載以

含生四時無形潛寒暑以





「落ち穂拾い記」③② 『集王聖教序碑・宋拓本』(下)

(図版③)



宋揚神品



内題簽

在々処々神物護持



(図版④)

王杰之印



清遠山人



右任読碑之記



張燕昌印



届いた拓本を再度、晚翠軒や二女社などの各種の影印資料と対照比較した。間違ひなく宋拓である。最初から認識していたところであるが、中程の六開(12頁)300字ほどが、明時代の拓本で補われてあった。拓調、拓墨もであるが、拓出された文字の点画の鋭さが全く異なり、茫洋とした点画である(図版②)。全体の15パーセントほどが明拓で、残りの8割余りは、間違ひなく宋拓であった。書聖・王羲之の書を集字して制作された名碑の宋拓を手にしたことは、嬉しかった。最初目にしたときは、普通の板表紙で、題簽に「旧拓懷仁集王羲之聖教序 丁丑冬至 李正峰題」とあった(20年ほど前の題簽である)。跋文もその他の題記も無く、ごく普通の装幀であったから、見逃されたのであろう。入手してしばらく気に止め無かったのだが、隸書で「聖教序」と書かれた小さな内題簽が、一葉貼り付されてあった。その隸書の3文字の下方に皮紙の繊維の雑物の陰に汚れのような小さな文字に気が付いた。「宋揚神品」と更にその下にある印影を何とか判読した。「在在処処神物護持」である(図版③)。貴重書の永く伝来しますようにの意であろうか。明確に先人は、宋拓と認識していたのである。更に幾つかの捺されている鑑蔵印に目を向けた。「芥舟鈐印」「清遠山人」「洪氏詒孫」「張燕昌印」「文魚」「金粟山人」「燕昌」「飛白樓」「玄之又玄」「王杰」「葆淳」「右任読碑之記」「憲齋」「息園」等の印を確認できた(図版④)。乾隆から嘉慶年間に活躍した飛白体をよくした張燕昌(1738~1814)の印が多く、近代の書に優れた于右任(1903~1964)等の印もある。途中で、一部が失われ、補修され、永い歴史を経てきた書物であることを物語っている。大切にしたい碑帖の一である。

伊藤滋(書齋名・木鷄室)

書道芸術院 令和の群像 (2022)



岩垣若翠

「純ちゃん、将来は習字の先生になるといいね」これは私が小学生の頃、祖父の姉に言われた言葉である。誉められて伸びる子供だったと思う。母の勧めで小学校2年生から当時鈴木翠軒派の田熊琢穂先生の教室へ通い始めた。中学から高校までは山本盤翠先生、高校卒業後は岩垣翠城先生と3人の先生の指導を受けた。高校3年生の時、全国学生書道展で「書道芸術院長賞」を頂き、初めて上京した。広い会場で目にした多くの作品に感動したことは、今も鮮明に記憶している。一緒に上京してくれた母からお祝いに、当時(50年前)一百万の羊毛の長鋒筆を買ってもらったが、もったいなくて何年か使うことができていた。この頃から書に対して真剣な気持ちに変わり

始めたように思う。

20代前半に書法研究集団「蘭芝会」のメンバーになった。月1回の定例会で古典のレポートを各自が発表し、年1回の展覧会で古典臨書と創作を出品することを30年余り続けた。

これ以降も様々な古典を臨書した中で、王羲之はもちろん、王鐸・顔真卿・何紹基は好んで臨書していたと思う。この事は後の作品制作に大いに役立っている。

毎日書道展に初めて入選したのは、「一字書」だった。恩地春洋先生を講師にお招きして、小学校の体育館で開催された講習会に参加した。大きな筆で身体全体を使い淡墨の滲みを出すことが難しかった。この日受講生全員が見ている中で書く緊張感が、

思いがけない作品を生み出すことを知ることになった。

恩師である翠城先生との忘れることのできないエピソードがある。初めての出産で何ヶ月か教室を休み、久しぶりに毎日書道展の添削会に参加した。その折先生から「社中^{（社中）}外」と告げられたのだ。人目も憚らずその場で土下座をして謝罪し、漸く許しを得ることができた。先生からの教訓は「一日として筆を置くべからず」だった。その日以来猛省し、今日まで休むことなく継続できていることは、先生のお陰であり心から感謝している。今は亡き師匠の一番心に残る思い出である。

現在は、書道芸術院山陰支局長の名越蒼竹先生の教室で、書友と共に切磋琢磨している。博識である名越先生から書道以外の多くの事も学ばせていただけていることは、本当に有難く幸せな事である。

今後は指導している生徒たちが、全国学生書道展で育った私のように「書の道」を目指してくれることを願い、微力ではあるが研鑽を積んでいきたい。



第71回書道芸術院展「麟慶詩」

岩垣若翠書

書のひろば

理事長 下谷洋子

第73回毎日書道展開幕 会員賞宮崎芳玉氏に

第73回毎日書道展は、5月の鑑別審査を経て7月の入賞審査、続いて会員賞選考会、文部科学大臣賞選考会が行われ、7月13日から8月7日まで国立新美術館で、7月18日から24日まで東京都美術館で開催された。

- 文部科学大臣賞
柳 碧鮮氏（大字書）
- 会員賞（本院関係）
宮崎芳玉氏（前衛書）

他25名
表彰式は7月24日午後、ザ・プリンスパークタワー東京で昨年同様規模を縮小して開催された。出席受賞者は書道顕彰・大臣賞・会員賞・毎日賞、秀作・佳作賞は各部門代表者となり、役員を含め500余名が参加、短時間であるが厳かな表彰式であった。祝賀懇親会は今年も中止となった。

東京展の後は、全国の会場の地方展が6・7月号掲載の通り開かれる。本院役員・会員諸氏のご協力ご支援をお願いします。

なお、小竹石雲常務理事は8月より毎日書道会理事に昇格されました。

第35回毎日書道顕彰は三氏に

書道芸術部門 原田凍谷氏
啓蒙部門（二社）エコ再生紙振興会
俊英賞 川本大幽氏

（俊英賞は本年より毎日展の将来を担うことが期待される新進作家（50歳以下）を対象として設けられた賞）
書道古紙のリサイクルに関しては、本院でも協力し、再生紙の普及に努めている。



会員賞受賞（宮崎芳玉）



院関係者集合写真

▽山陰支局で巡回展が盛大に開催

7月14日～18日まで名越蒼竹実行委員長のもと、倉吉博物館を会場に盛大に開催された。歴代会長をはじめとした役員に併せ、香川峰雲先生の遺作17点、地元会員87点、児童生徒約160点が展示された。新鮮で書の領域の広さ、奥深さに感嘆させられた記事が地元紙に紹介されていた。



2022年7月17日付 日本海新聞掲載写真

16日の研究会には院より、前理事長辻元大雲顧問と、下谷洋子理事長のピンチヒッターとして小竹石雲常務理事が激励に参加。コロナの蔓延防止のため、日本海新聞中部本社のホールで密を避けて行われた。辻元顧問より書道芸術院の誕生の経緯、理念が紹介された。「既存の価値にとらわれず、新しい時代に合った多様な書の追求が大切」

との話、歴代会長の個性豊かな作をビデオで投影しながらの解説で書の魅力が一層深まった。その後小竹常務理事とで席上揮毫を行った。筆者によっての古典の捉え方の違い、現代詩文書の方々のお陰で無事研究会が終了されたことに感謝申しあげたい。

第46回夏期書道大学講座中止

全日本書道連盟主催の夏期書道大学講座（本誌6月号（74）50ページに掲載）は、8月5日～7日まで3年振りに開催予定だったが、新規感染者の急増により今年も中止となった。受講定員をコロナ禍前の半数にするなど感染防止対策を講じて慎重に準備を進めていたが、残念であった。

書道芸術院単位認定岡山講習会 コロナ感染急拡大のため中止

昨年は、岡山会場から東京に移して企画していたが中止、今年こそ再度岡山でと、8月20日の、一日講習会として単位認定講習会の準備を進めて来た山陽支局だったが、ここに来て第6波のピークを超えた状況を鑑みて、今年も中止とした。すでにお申込みいただいた皆様方には誠に申し訳なくお詫び申し上げます。

来年は、北日本支局に移動し盛岡での開催の予定。ご了承下さい。

【臨書から現代詩文書への展開】

① 枯樹賦風のひらがなの表現方法



・文字の大小の変化を自由につけ楽しんだ。
・発展的臨書から一気に書いた。渴筆の多彩な線に響きを求めた。

② 枯樹賦風の現代詩文書



・古典に秘められた格調を落とさぬようにという理性が勝り、少々つまらなくなっただ。
・古典の解釈と詩文の解釈の一致は至難の業。

「あをによし奈良の一夜の菖蒲酒」 深見けん二句

基礎基本講座

○前衛ということ

前回、漢字について、秦の時代（篆書）からすれば、隸書はスマートな斬新な前衛的書体であると述べたが、篆書から隸書への流れから前衛を考えてみたいと思う。

漢字は絵文字（甲骨文）から始まって、篆書、隸書、楷書、行書、草書という書体に変化した。今はこの五体が書体として定着しているが、中国四千年の歴史の中では八体とも十体とも呼ばれ、歴史の中で消えていった書体もあったはずである。

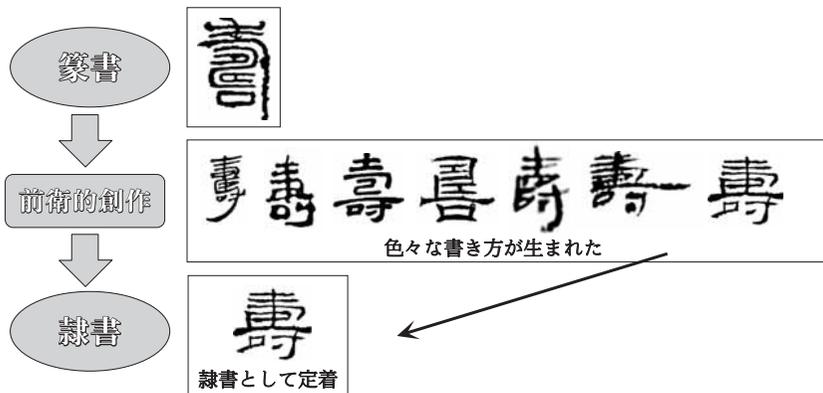
篆書の字形が、時代的欲求（単純化、速書、美的価値）によりさまざまな書き方に変化した。これが前衛的創作（既存の概念や形式にとらわれず、先駆的・実験的な表現を試みる）である。

現在の私たちから見れば、当然の書体（表現形式）であっても、当時の人たちからすれば斬新な表現だっただろう。

前衛作品も同様で、様々な表現を試みてはいるが、残るものもあれば消え去ってしまうものもある。だが、芸術とは先人の残した鎖に、もう一つの輪を継ぎ足していくものである。という言葉のように、新しい何かを追い求めなければ、

ただの模写で終わってしまうのではないか。

篆書から隸書の変化





井ノ口春峰
(千葉)

「博学而篤志」

近くの書道同好会に通い始めたことが縁で、書を学ぶ楽しさを知ることができました。三浦扇衛先生、鄭衛先生をはじめ諸先生方にご指導いただき、また、よき仲間にも恵まれここまですることができました。心より感謝申し上げます。新たなスタートを迎えた今、自分を見つめ直し、広く書と真摯に向き合い研鑽を重ねて参りたいと思います。

(春峰)

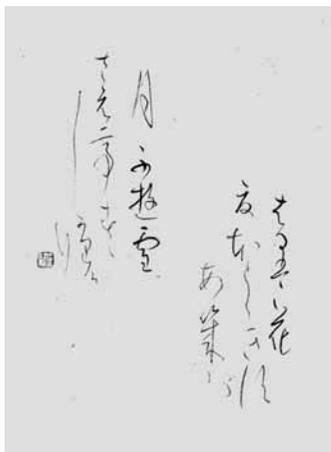


清水由紀子
(東京)

「春は花」

この度は審査会員にご推挙頂きありがとうございます。いつも温かくご指導くださる石井明子先生をはじめ玉松会の先生方、素敵な書友の皆さまに心より感謝申し上げます。今後も古典をはじめ多方面から学びを深め、美しいかな書の表現を探究して参ります。

(由紀子)



柄山明珠
(長野)

「花」

この度は審査会員にご推挙いただき、小浜大明先生はじめ諸先生方に、心から感謝申し上げます。何分にも未熟者であり、ようやく深淵なる書の世界の入口に立ったところだと自認しています。自然豊かな地に住まいし、四季折々の花々にも励まされなお一層精進する所存です。

(明珠)

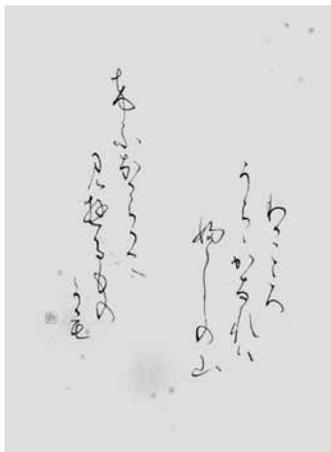


高山裕子
(神奈川)

「わがこころ」

この度は審査会員にご推挙いただき誠にありがとうございます。熱心にご指導くださる下谷洋子先生、書泉会の諸先輩方に感謝申し上げます。自分自身で創作する難しさを日々感じております。先生の教えである古筆から学ぶことの大切さを忘れず、今後も精進して参りたいと思います。

(裕子)



※9月号でも引き続き、新審査会員の紹介をいたします。

古典鑑賞

枯樹賦こじゆふ (唐 630年)

褚遂良ちゆすいりやう

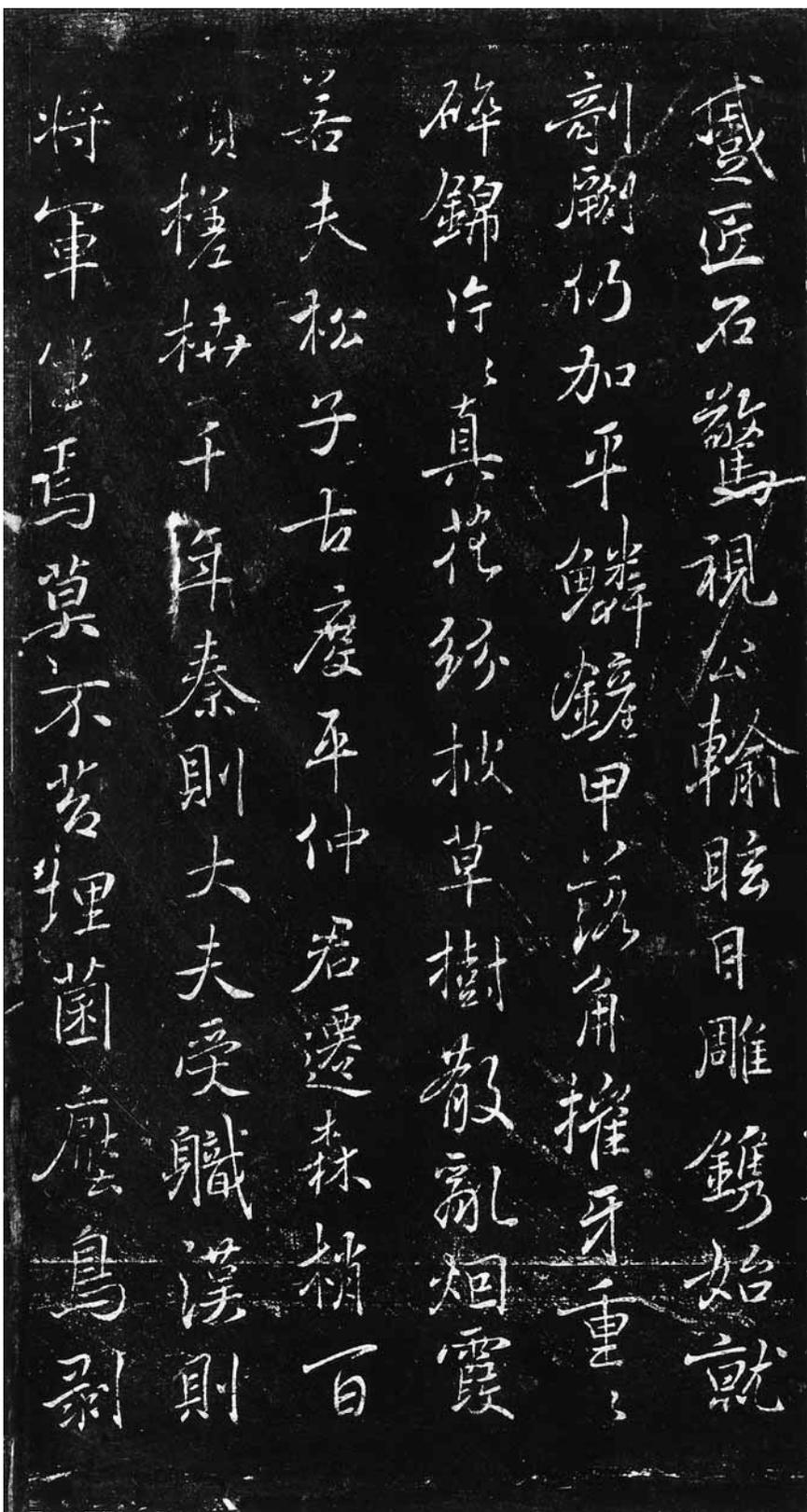
②

447

〔解説〕枯樹賦の書風は、王羲之の書法を継承しながらも、独自の境地に至っており、奔放でゆるぎない造形感覚と軽妙で情緒豊かな筆致が魅力である。字形は、右上がりの菱形が多く、縦長で胴がふくらんでいて、懐が大きい。一字の中に偏と旁、冠と脚などの大ききや位置に変化をつけながら、太い線と細い線を組み合わせて、

一字構成にたくみなバランス感覚を見せている。線質はねばりが強く、弾力に富んでいるが軽やかである。また、俯仰法(筆を持つ掌を下に向け俯したり、上に向け仰いだりさせて書く方法)などの用筆が多く見られる。筆は抑揚緩急の変化をつけながら気脈の貫通に留意して、空間の連筆を大きくゆっくり運ぶことが大切である。

(編集部)



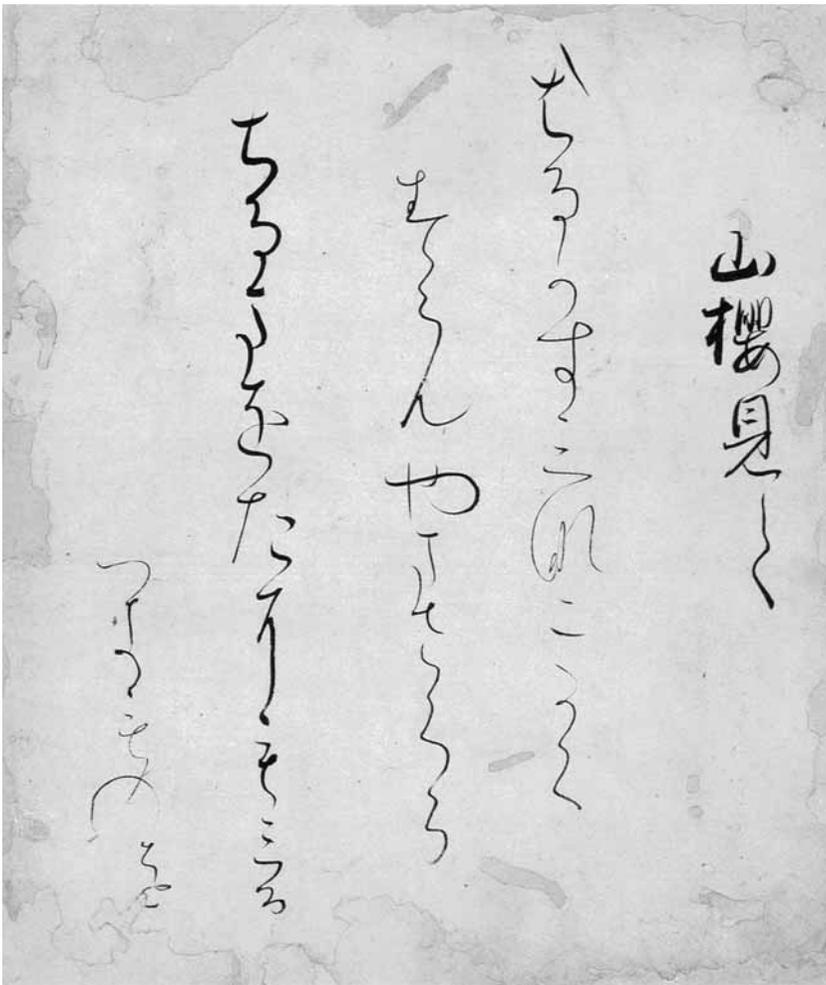
(掲載図版・75%に縮小)

蹙。匠石驚視。公輪眩目。雕鏤始就。削剝仍加。平鑿錘甲。落角摧牙。重々碎錦。片々眞花。紛披草樹。散亂烟霞。若夫松子。古度。平仲。君遷。森梢巨圍。槎枒千年。秦則大夫受職。漢則將軍坐焉。莫不苔埋菌壓。鳥剝

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみも可)

漢字研究部臨書課題 (半紙普通判・縦使用) 上記掲載部分より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題 (A. 大作の部—毎日展審査会員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可) 当該古典の上記掲載部分以外も可。
B. 小品の部—半切¹/₂以上半切以内、全紙¹/₂以内も可(A・B縦横自由)



(藤田美術館蔵)

〈よみ〉

山桜見
はるがすみなにかく
すらんやまざくら
ちるまをだにもみる
べきものを

〔解説〕升色紙は、伝紀貫之筆(寸松庵色紙)、伝小野道風筆(継色紙)とともに「三色紙」といわれている。鋭利な穂先を使いこなしした暢達した線、リズムカルな連綿、効果的な墨継ぎで余白の美しさが強調されている。さらに明るく穏やかな線とともにその散らし書きは変化に富み、さりげなく散らすもの、大胆に散らすもの、中には行を絡ませて文字を重ねて書くものなど、極めて巧妙な手法を見せている。筆者を藤原行成と伝えるが、その書風と料紙装飾からみて11世紀後半の書写と推定される。(編集部)

※掲載図版は原寸

※古筆は原寸(以上も可)で臨書し
ましよう。

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみも可)

かな研究部臨書課題

(半紙普通判(料紙可)を縦長に使用)半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。別紙を裁断して貼付も可。〈上記古筆の掲載部分を書く〉

特別研究部臨書課題

A. 大作の部=毎日展審査会員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可
B. 小品の部=半切 $\frac{1}{2}$ 以上半切以内、全紙 $\frac{1}{2}$ 以内も可(A・B縦横自由)
〈いずれも上記の掲載部分以外も可〉

漢字規定 初段以上 【九月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

辻元大雲選書

習い方解説 (五)

辻元大雲

雲影千峯合

うんいせいせんほうがっ
(雲影千峰合し)

半紙5文字表現は一般的に3文字2文字の2行構成となりますが、文字の大小、潤渴の変化で紙面に大きな動き、リズム感を生むことができます。今回は行草を交え、動きある表現を意図しました。

羊毫中長鋒による線質の変化がポイントです。「千」の1画目は右上から入ります。左から右へ引くと「千」となります。ご注意ください。



雲影千峰合

よみ (雲影千峰合し)

書体||自由

漢字規定 秀級以下 【九月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

半田藤扇選書



樹陰読書

よみ (樹陰に書を読む)

書体 楷書

習い方解説 (五)

半田藤扇

樹陰読書 「現代書作必携」
(樹陰に書を読む)

緒遂良晩年(58歳)の書である「雁塔聖教序」の書法に挑戦してみました。

線質は、抑揚と粘りがあり、緩急・強弱の変化に富んでいます。細身でありながら大ぶりの悠然とした書風です。用筆のバネを利かせてください。

初唐の代表的な楷書として名高く、褚法・虞法・欧法とそれぞれに大きな特徴を有している点でも史上で何かと比較されます。注目を浴びる作品群ではないでしょうか。

※羊毛筆を使用

〈参考作品〉



かな規定 初段以上【九月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判(料紙可)

平川峰子 選書

習い方解説 (二)

平川峰子

ぬばたまの夜の更けゆけば久木生ふる
清き河原に千鳥しば鳴く

(山部赤人「万葉集」)

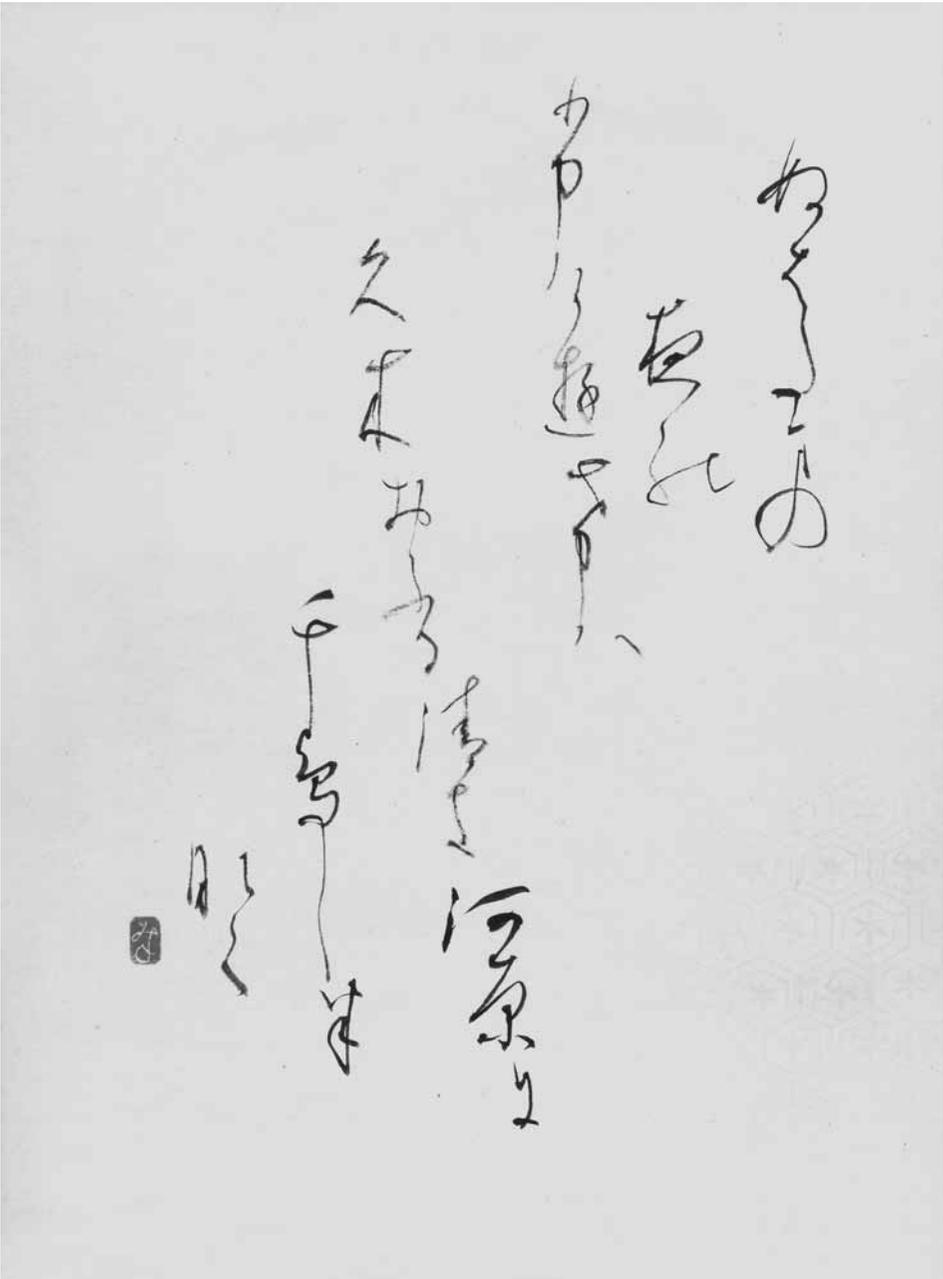
「夜が次第に更けてゆくと久木の生ふる清らかな川(河)原で千鳥がしきりと鳴いていることだ」の意。

山部赤人(生没年未詳、奈良時代の宮廷歌人)は聖武天皇に仕え、各地への行幸に従い名歌を多く残した。

かなの散らし書きの構成は古筆の継色紙や寸松庵色紙を参考にすると良いでしょう。それをアレンジしてさまざまに変えていくことも楽しい作業です。今回は上行の長さを変え、行間の広さを工夫し、長い行はまっすぐではなく少し右に倒しながら書いてみました。

構成で余白を考え、墨色で濃淡と潤濁、文字の大小、線の太細、遅速など変える要素はたくさんあります。多様な試作をして表現してみてください。

*料紙は半紙版(33.0×24.5cm)を使用しましょう。



よみ方 ぬば(者)た(多)ま(万)の夜の(能)更(布)け(介)ゆ(遊)け(希)ば(八)久木生(お)ふる

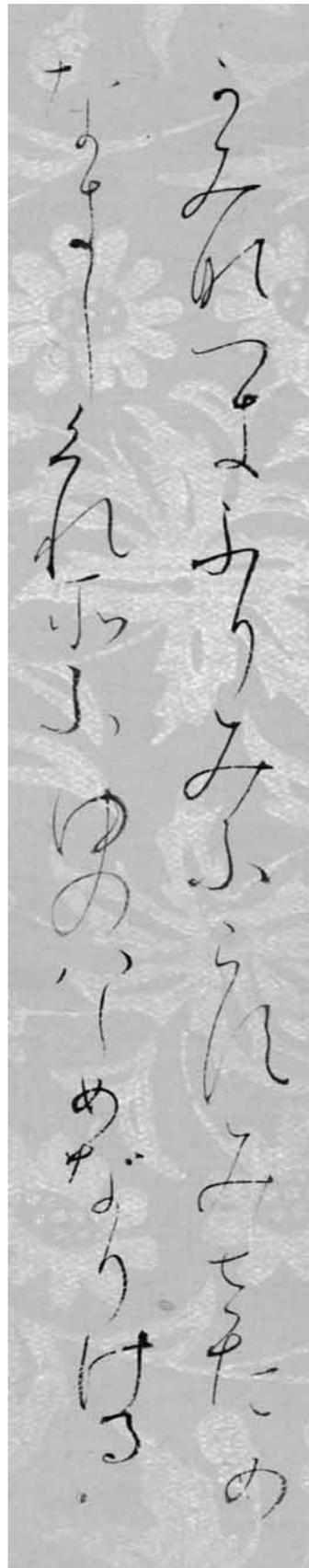
清き(文)河原に(尔)千鳥しば(半)鳴(那)く(久)

創作

かな規定 秀級以下 【九月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ1½ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真の和歌を臨書する。または部分(2字以上の連綿または単体を含む)を臨書する。

粘葉本和漢朗詠集
(掲載写真拡大120%)



よみ方 か(可)みな(那)づき(支)ふりみふらず(須)みさだめ

なき(支)しぐれぞ(所)ふゆのは(八)じめなりける

習い方解説 (一)

小島 孝予

いつくにも今宵の月を見る人の
心こころや同じ空そらにすむらん
(藤原忠教「金葉集」)

かな条幅規定 【九月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切 (料紙可)

小島 孝予 選書



よみ方 い(以)づ(徒)く(久)に(尔)も今宵の月を見美る(留)人の

心こころも(裏)や同(於)な(じ)空そら(曾羅)に(尔)す(寸)む(武)らん

創作

かなの流麗さを表現するには連綿がとても重要です。連綿は実線による連綿と実線によらない意連(空中で連綿)があります。連綿線は短めを心がけ、不自然な流れにならないよう文字を選び連綿します。また意連によって終筆の流れを受けて空中から次の1画に入ることで、流れが続きます。すっきりとした連綿で流麗さを表現しましょう。

※タテ形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 【九月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

種谷萬城選書

壬戌之秋七月既望蘇子與客泛舟遊於赤壁之下

壬戌之秋、七月既望、蘇子與客泛舟遊於赤壁之下
(王戌の秋、七月の既望、蘇子客と舟を泛べて赤壁の下に遊ぶ。)

書体||自由

漢字条幅規定 秀級以下 【九月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

千葉蒼玄選書

心静即身涼

心静即身涼 (禅語)
(心静なれば即ち身涼し)

書体||自由

王羲之「集王聖教序」



習い方解説 (五)

種谷萬城

今月は、波磔のある隷書「八分」で書きました。秦に誕生した隷書は、漢代の正式書体です。起筆は藏鋒、収筆に波勢。特に波磔に裝飾的な筆法が見られます。横広の字形、水平・等間隔の横画、転折部は筆を一度引き抜き、改めて藏鋒で入筆します。隷書特有の基本的な書法を理解し、魅力溢れる漢簡・漢碑の名品を学んで下さい。

※タテ形式に限る

習い方解説 (五)

千葉蒼玄

「ところが静謐であれば身体も清涼である」の意。

蘭亭叙は神品とよばれるものの字はすべての字形が変化している。私たちの目には王羲之の字はありふれた字形として映るが、よく観察すると活字と違い均衡な形ではない。わずかに上から下に行くにしたがって右にずれてくる。文字自体がわずかに左にお辞儀をする形といわれるが、これが上品さにつながる。

習い方解説 (五)

北村白琉

われもともも
物狂ひのいごと筆揮ふ
飛沫を画仙の
外骨に及ぼして
雅休のうた 白琉書

◇用紙 ハガキ大(14.8×10cm)の白紙を使用
◇黒インクのペンを使用(ボールペン・フェルトペン可)

書体＝自由

【注意】

用紙の大きさにばらつきが見られます。

用紙サイズ(14.8×10cm)を守って下さい。

大澤雅休は偉大な書家であるばかりでなく歌人でもあり、たくさんの秀歌を遺しています。今月はその中の、揮毫に立ち向かう自らの姿を詠まれた一首を書きました。

雅休の活動拠点である平原社の狭い部屋には、全国から弟子たちが訪れ、雅休は「せっかく来たのだから…」とよく揮毫して見せてくれたそうです。

漢字かな交じり文を書く場合、漢字は少し大きめに、かなは少し小さめに書くと全体の調和がとれます。

われもともも

物狂ひのごと筆揮ふ

飛沫を画仙の

外骨に及ぼして

雅休のうた

葉月 新涼 神奈川県 長野県

葉月 新涼 神奈川県 長野県

雲の流れもようやく秋めいてまいりました
雲の流れもようやく秋めいてまいりました

三浦鄭街

(掲載手本90%に縮小)

- ◇小筆・筆ペン・サインペンなどを使用 署名は各自の姓号を
- ◇用紙は普通版半紙横 $\frac{1}{2}$ (24.5×16.5cm) B5版コピー用紙(26.0×18.1cm)も可
- ◇所定の出品券を作品の右下に貼る <審査会員を含む誰でも出品可>

(楷書) 葉月 新涼 神奈川県 長野県
(楷書) 雲の流れもようやく秋めいてまいりました

(行書) 葉月 新涼 神奈川県 長野県
(行書) 雲の流れもようやく秋めいてまいりました

基本用語 「葉月」旧暦8月の別称。「新涼」

秋の初めの涼しさ。

木一平作品
各部総評

NO. 734

ペン字部 師範 高橋 雅泉
布置が見事。絶妙な行間余白によって、作品が立体的に見える。詩の光景が浮かぶような爽快作。
◎ペン字部総評 全体的に安定した作品が多かった。天地左右の余白を一工夫することで、さらに紙面が引き締まります。(孝子評)

ひとつよりふたつ
ひとりよりふたり
さつとそのほうが自然なんだ
妻と並んで枝豆をたべろ
星野富弘「枝豆」雅泉書

漢字条幅部 師範 名取 美袖
手慣れた運筆が澄明な筆線に輝きを生み、美しい余白に酔いしれる見事な作に仕上がる。
◎漢字条幅部総評 各社中の特徴を生かしながらも個々の研究を深め紙面展開の自在さをもっとあってもよかったと思う。(石雲評)

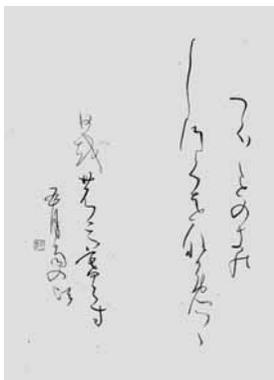


前衛書部 特選 中山 麗芳
意表を突きながらも正常感を維持させた力量は見事。これからもう少しし挑戦されたし。
◎前衛書部総評 創意工夫され各自の実力向上が伺え感動。月並みながらさらに努力を願う。(慧香評)



かな条幅部 師範 片岡 照徳
リズムに乗ったバランスのよい作品である。過不足なく快く深さを感じさせる心の置き所は見事。

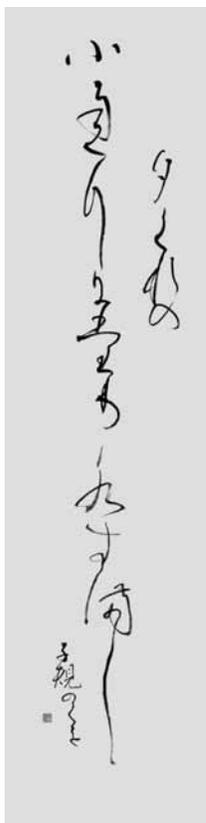
かな部 師範 櫻田 龍貞
澄明な線が美しい。紙面に対してのバランスも美事につかんでいます。是非独自の世界を探りたい。
◎かな部総評 概ね調和のとれた作が多く好ましい。零(し徒く)のかな遣いと徒の認識不足散見。かなの線は太細が大切。(洋子評)



漢字部 師範 田中 岳舟
木簡隷書の冴えのある筆線で魅力的な作品。構成巧みで筆力充実。心豊かな筆者ではなからうか。
◎漢字部総評 全般に、磨かれた線質が多かった。創作する上での造形・線質は、日頃の古典の勉強が必要不可欠です。(藤扇評)



◎かな条幅部総評 墨量変化乏しく布置の良くないもの散見。美しい紙面を創るために平素から、古筆を眺め字形の研究を。(明子評)





史定蛭祥桃
江帆江舟翠
漂う線の構成美がモダン
シンプルでダイナミック
軽快な筆致艶のある作
流動線の集合で清涼感あり
飄々とした渴筆線に力感

えり奈
綾雪
米杏
詠子
汀泉
羽化を終え飛び立つ寸前
淡墨の静止世界を訴える
曲線の個性が飛沫で和む
天駆ける曲線の妙よい
濃濁線がスマートに躍動

選評 三森 慧 香

美一葵睦玲
悠琴龍子子
句の意味と作品の妙味
かすれと伸びと点に集約
深い意味の素材情感豊か
ふところ深く余白美しい
伸びやかでゆったりの作

美杏京眞紅
翠邑仙華雨
運筆と構成の妙清らか
まさに切り込む筆運び快
文字の表情豊かで明るい
筆の開閉揺るぎない見事
水墨画の世界構成も佳

祥雄虚光光
舟一拙永燁
躍動と美しさ明快な作
読みにくさと存在感あり
大迫力の運筆圧倒された
潤濁のゆらぎ瑞々しい
立体感ある線質構成見事

真由美
一美梢
大小構成つきせぬ魅力
イメージを淡墨に重ね佳
淡墨の魅力豊か品格漂う
しなやかで優美な線の妙

選評 山崎 掃 雪

今月の

特別研究部優秀作品(特選)

選評 小竹石雲 石井明子 山口仙草 佐藤菜扇

小品の部

臨書 (若葉) 工藤山房 「高野切第一種」



工藤山房臨

35×137cm

◆古筆の鑑賞能力が抜きん出っていて、雰囲気のある作品を生み出した。線を鎮めて、沈めて見応えあり。

(明子評)

漢字 (四枝) 及川豊流 「濶達大節」



138×35cm

◆濃墨を用い、筆の弾力を活かした躍動感溢れる作品となった。全体をバランス良くまとめている。

(菜扇評)

及川豊流書

現代詩文書 (素雪) 坂本芳博 「一空也の詩」



135×35cm

◆^{ほくろ}朴訥とした線で^{かみく}寡黙の世界に独自性を感じる。詩情を意識してのことか?この面構えが魅力的。

(石雲評)

坂本芳博書

前衛書

(蓮紅) 本田美雪 「和予」



136×35cm

◆細く切れ味鋭い線質の作で、豊かな表現に今後が期待される。

(仙草評)

本田美雪書

〈小品の部〉

創作の部(43点)
漢字 1 8点
かな 1 3点
現代 1 18点
篆刻 1 1点
前衛 1 13点
臨書の部(40点)
漢字 1 36点
かな 1 4点
総出品点数 83点

〈特選候補者〉

〔創作の部〕

〔漢字〕

花笠 高橋 清琳

〔かな〕

白珠 相内 珠莉

〔現代詩〕

誠和 石崎 甘雨

花香 藤井 花香

香苑 小川 香燐

もく 森田 藤谷

〔前衛〕

大拙 佐藤 陽子

秀水 青木 かよ

〔篆刻〕

石心 大沼 樵峰

〔臨書の部〕

〔漢字〕

紅瑤 原島 春汀

大雲 宮原 香扇

華祥 加藤 和栄

己未 多田 桂彩

澄春 原澤 雄一

澄春 土屋 雅芳

華祥 加藤 雅芳

澄春 新行 内芳蘭

八街 三浦 小樹

英樹

臨書 (紅瑤)
相澤敦子
「薦季直表」

先帝神略奇計委任得人深山窮谷民獻米豆
 道路不絶遂使强敵喪膽我衆作氣旬月之間
 廓清蟻取當時實用故山陽太守關内唐季直
 之策剋期成事不差毫髮先帝賞以封爵授以
 割郡今直羅任旅食許下素為廉吏衣食不充
 臣愚欲望聖德録其舊勲於其老田復得一州
 俾圖報効直力氣尚壯必能夙夜保養人民臣
 受國家異恩不敢雷同見事不言 敦子臨

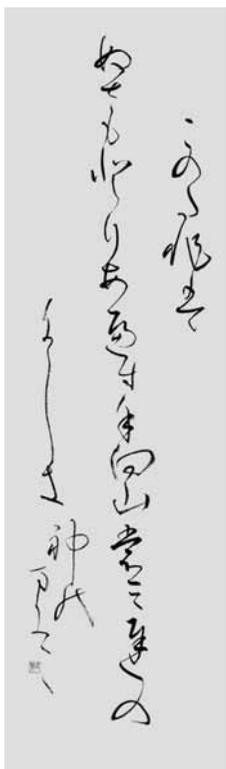
相澤敦子臨

135×70cm

◆紙面の行間に
 ゆったりとした
 雰囲気がある。
 原帖をよく観察
 し厚味のある線
 を見事に表現し
 た堂々の作。

(菜扇評)

かな (奥田)
三宅直美
「このたびは」



三宅直美書

160×45cm

◆字粒の変化を
 つけながら伸び
 やかに紙面を支
 配して快い。藏
 鋒を意識すると
 中央の行がさら
 に高まるか？

(明子評)

前衛書

(大拙社) 大庭幸石 「明日への誘い」



大庭幸石書

180×60cm

◆中心を貫通する
 鋭い線が響き合
 い新鮮な作中とな
 っている。下部の飛
 沫が余白を活かし
 心地よい。

(仙草評)

現代詩文書 (八戸)

市川紫泉
 「吉野鉦二一の歌」



市川紫泉書

60×180cm

◆線の太細、墨の潤濁を駆使し、
 瀟洒な文字造形と構成で現代
 感覚溢れる作に仕上げられてい
 る。ただ、読づらさあり。

(石雲評)

〈大作の部〉

〈特選候補者〉
 創作の部(40点)
 漢字 3点
 かな 10点
 現代 9点
 前衛 18点
 臨書の部(18点)
 漢字 15点
 かな 3点

総出品点数
 58点

〔漢字〕
 奥田 小林 漢姫
 奥田 安本 琴舟
 奥田 小林 漢姫
 〔現代詩〕
 もく 西川 藤家
 玄穹 尾形 紅霞
 蒼香 高橋 蒼香
 〔前衛〕
 大拙 皇中 成山
 紅瑤 佐藤 成美
 秀恵 阿部 雅悠
 紅瑤 廣田 紫
 月華 浅野 玉翠
 〔臨書の部〕
 〔漢字〕
 紅瑤 木暮 千晶
 土気 杉田 祥風
 紅瑤 金井みどり
 東総 薄田 春緑
 千葉 竹浪 叙舟
 清月 境野 和子

漢字研究部
(薦季直表)

選評 稲垣小燕

今月のホープ作品

望聖德録其舊勲矜
其老困復得一州俾圖
報効直力氣尚壯必能
夙夜保養人民

高橋雅泉

漢字研究部 特選 高橋雅泉

真摯に臨書する姿勢が伝わってきました。

「薦季直表」は華やかさのある古典ではあり

ませんが滋味深く、温かみを感じられます。

出品作品は原帖の雰囲気そのまま伝わりま

とまった優れた作になっています。

◎漢字研究部総評

今回特に大雑把な作品が多く残念に思いま

した。そこで学書する姿勢を今一度考えてみ

ましよう。臨書には形をそっくり見たとおり

に書く形臨と、その書体から書き手の意をく

みとって書く意臨があります。臨書はまずは

形を写す形臨から始めるのが基本であると思っ

ています。文字の大小、線の太細を忠実に捉

えて字形、運筆、筆勢等を学び取る。その上

で作者の意や感情をくみ取り書きこむと生き

た、優れた臨書になると思います。

望聖德 録其舊

尚壯 必能

受國 家異

臣受國 家異

國 家異

恩 家異

美和蛭峰桃 小生江美 穂

復得一 州俾圖

直力氣尚壯必能 夙夜保養人民臣 受國家異思不敢雷 同見事不言

人民臣 受國家

俾一州 俾圖報

臣受國 家異

國 直力氣

江嘉智紀篁美 彩美美子葵艸

氣尚壯必能夙夜保 卷人民臣受國家異 思不敢雷同見事不 言千犯宥嚴臣繇皇 恐頓首謹言

臣受國 家異

圖報 直

宥嚴臣 繇皇

直力氣 尚壯

臣受國 家異

麻美真陽幹 矢梢葉峰子 泉

望聖德 録其舊

望聖德 録其舊

俾圖報 効直力

臣受國 家異

直力氣 尚壯

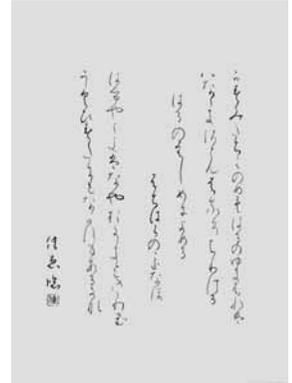
望聖德 録其舊

陸月子麗子 清子 美子 篤子 梅香

かな研究部
(高野切第一種)

選評 奥田 瑞舟

今月のホープ作品



苗代 佳恵

かな研究部 特選 苗代 佳恵

白や薄い茶系の料紙の中に、淡い空色を中心に上下のボカシが美しい紙に、繊細で流麗な運筆。墨継も巧妙で美しく気品あり、美しい細線との調和自眉。

◎かな研究部総評

高野切第一種の中でも取り入れたい要素の多い所もあり、全体に密度濃く臨書されていた。読者の「ふ(ふ)ぢはらの(ふ)の(ふ)が者(ふ)になつた作品が多く見られ残念に思いました。



紀伯花
舟泉源

光寿美
美智恵

芳和
博子美

幹麗
朗生子

かな研究部成績表

秀歌	中川	高井	森地	清月	松村	秀	幸扇	日新	蘭嶺	京雲	菊雲	正蓮	英峰	清雲	竹美	書秋	秀秋	紅秋	一秋	素月	清月	上泉	高崎	樓草	苗代	特選	
大野	大島	榎田	池島	青木	飯木	作(苗)	野村	石川	市川	吉田	新井	沼川	吉瀬	鷺山	八木	武井	雅山	村本	坂野	城野	七五	早部	飯高	二通	苗代	特選	
千鶴	千鶴	千鶴	千鶴	千鶴	千鶴	千鶴	千鶴	千鶴	千鶴	千鶴	千鶴	千鶴	千鶴	千鶴	千鶴	千鶴	千鶴	千鶴	千鶴	千鶴	千鶴						
玉松	惠泉	華仙	高崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎
飯阿	熱上	藍海	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
上原	藤書	土高	映春	春高	春高	春高	春高	春高	春高	春高	春高	春高	春高	春高	春高	春高	春高	春高	春高	春高	春高	春高	春高	春高	春高	春高	春高
高須	須藤	鈴木	杉野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野	菅野
選外	東井	華伯	幸扇	祥蓮	青蓮	あか	八街	中街	中華	華雲																	

〔特別昇段級試験参考手本〕

お知らせ

秋の特別昇段級試験の課題手本（創作作品）を掲載いたしました。参考にしてください。
（編集部）

漢字部

第二種

◇創作・楷書



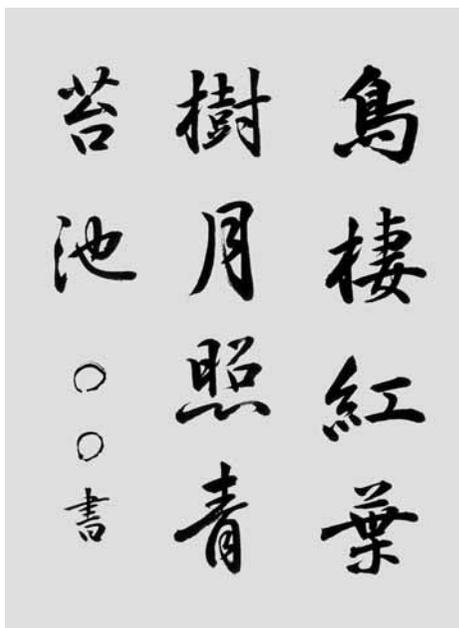
松潭月色涼（松潭月色涼し）

（孟賁）

漢字部

第三種

◇創作・行書



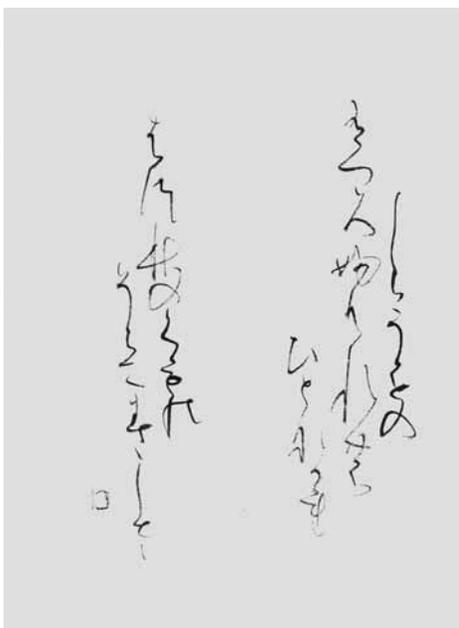
鳥棲紅葉樹 月照青苔池
（鳥は棲む紅葉の樹。月は照らす青苔の池）

（白居易）

かな部

第二種

◇創作（和歌）



白魚の移ろふ群のひとながれ初秋の雲の空にすずしさ（北原白秋）
よみ方 白しゆ魚の移ろふ群（有ころふ）婦群（无れ）の應ひとな（那）が（可）
れ連（初）者徒秋の雲（久毛）の（能）空（曾）（た）（た）（す）（春）（す）（し）（た）

漢字条幅部

第一種 ◇創作 (行書または楷書どちらか1枚)

〈楷書〉



讀書怡我心 (書を讀み我が心を怡はす)

(洪景廬)

〈行書〉



讀書怡我心 (書を讀み我が心を怡はす)

(洪景廬)

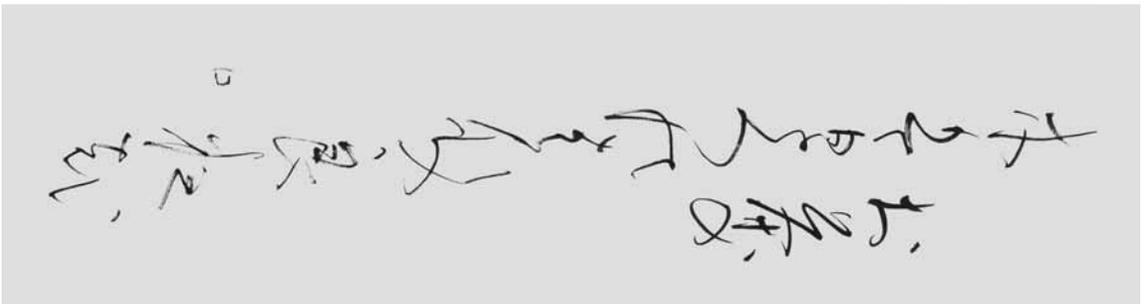
第二種 ◇創作・行書



柳色漸輕秋雨暗香時爲好風來 (張冠正)
(柳色漸やく輕く秋雨暗く、花香時に好風の爲に來たる)

かな条幅部

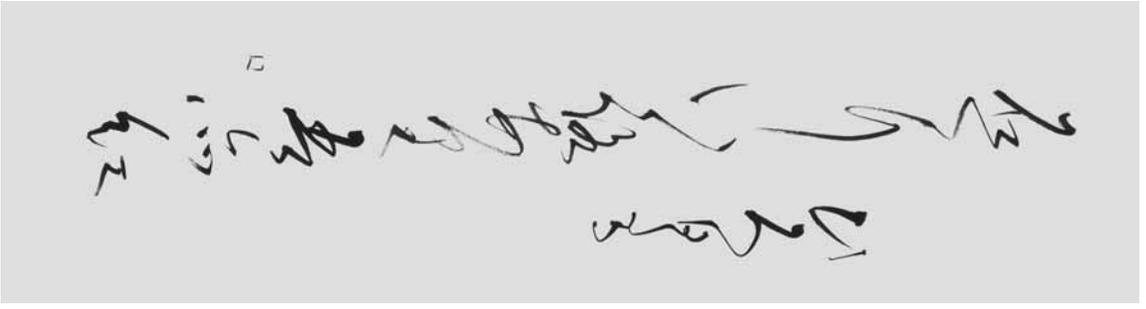
第一種 ◇創作 (排句)



お茶の木は一つの花の良夜かな
よみ方お茶の木は戀(ひと)つ(能花室那)の良夜かな(哉)

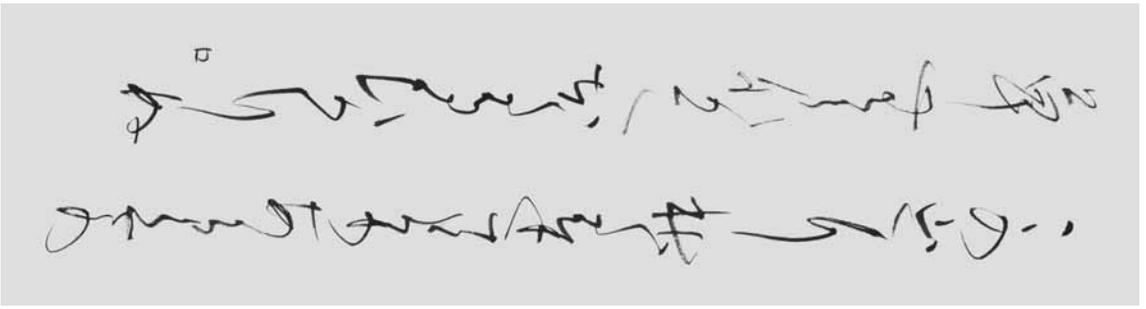
(渡辺水巴)

第二種 ◆創作 (排句)



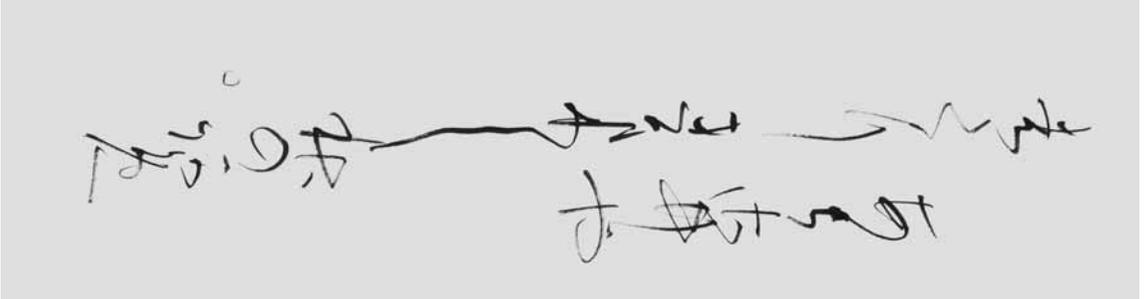
(長谷川かな女)

◆創作 (和歌)



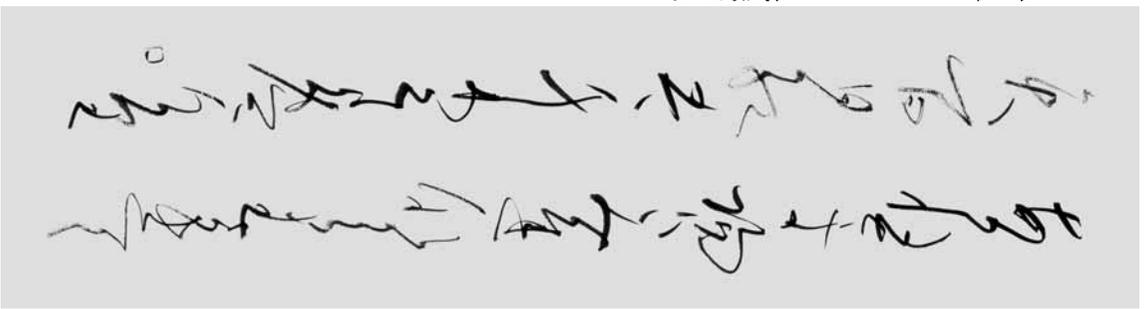
(斎藤茂吉)

第三種 ◆創作 (俳句)



(正岡子規)

◆創作 (和歌)



(吉野秀雄)

よみ方(あ)か(ね)さ(す)陽(は)濡(ち)な(ら)が(ら)す(が)し(く)て(百)日(紅)は(散)り(そ)め(に)け(り)
(二)け(合)り(里)

◇楷書

太宗の温泉銘は、筆を自在に抑揚させ、皇帝らしい気宇の大きな書である。現在その拓本はフランス国立図書館に収蔵されている。○○書

◇草書

太宗の温泉銘は、筆を自在に抑揚させ、皇帝らしい筆宇の大きな書である。現在その拓本はフランス国立図書館に収蔵されている。○○書

◇行書

太宗の温泉銘は、筆を自在に抑揚させ、皇帝らしい気宇の大きな書である。現在その拓本はフランス国立図書館に収蔵されている。○○書

太宗の温泉銘は、筆を自在に抑揚させ、皇帝らしい気宇の大きな書である。現在その拓本はフランス国立図書館に収蔵されている。○○書

- 第一種 楷書 (1枚)
- 第二種 楷・行 (計2枚)
- 第三種 楷・行・草 (計3枚)

※臨書作品は、7月号(735号)の50~55ページの写真掲載の古典・古筆の中から、指定文字数を臨書して下さい。

※昇段級試験課題手本についての「昇試相談」は、今後中止といたします。

※作品締め切りは9月15日(木)です。

(編集部)

書展

第38回 白玄会書展

野口加奈

会期 令和4年7月8日(金)
11日(月)
会場 高崎シティギャラリー

少し暑さの和らいだ7月10日、三森慧香先生とともに墨象(前衛書)を活動の主体とする白玄会書展を訪問しました。高崎シティギャラリーに入ると、会長の金井如水先生はじめ、社中の先生方に笑顔でお迎えいただき、華やかな会場へと進みました。

まず、白玄会創設者の山本津水先生の優美な遺作「申」に魅了されました。その雰囲気は白玄会の精神を感じました。今回は61名のみなさんが、墨象だけでなく、漢字、かな、近代詩文書作品など多彩な作品を発表されていました。特に練度の高い臨書作品の多さに驚かされました。前衛書の基本に古典臨書があることを確信しているかのような意欲的な作品の数々に圧倒されました。

理事の先生方による「挑(いどむ)」をテーマにした墨象中心の小作品コーナーもありました。同じテーマを与えられたみなさんが、それぞれに工夫され、多彩な表現を見せていることに感

銘を受けながら楽しく拝見しました。来場のお客様の多くが足を止めて見入っていました。

古典の研究をはじめとして幅広く目標を据えて研鑽を積まなくてはならないと気持ちを新たにさせられました。良い勉強の機会をいただいたことに感謝し、白玄会の皆様の今後ますますのご活躍を祈りつつ会場を後にしました。



広くて明るい会場



理事による小作品コーナー テーマ「挑(いどむ)」

〈月例競書 級位の方へお願い〉

毎月の出品時、昇級調査を必ず行って下さい。調査が済んでいない場合は出品券に現在の級を記入し、その上の余白に赤で未調査と明記して下さい。よろしくお願いいたします。(編集部)



◇夏季休暇のお知らせ◇

今年の夏季休暇は
8月12日(金)～16日(火)とさせていただきます。
よろしくお願いいたします。

公益財団法人 書道芸術院

●篆刻

【九月十五日締めきり】

〈出品規定〉審査会員を含む、誰でも出品可。

- ① 摹刻 (ア) 課題による語句 (イ) 原印自由 (出品の際、原印のコピー添付)
- ② 創作 語句自由

- 印面の大きさは2.3cm(八分角)以内とし朱文、白文自由。
- 印箋は市販のもの、半紙横1/2の大きさに切ったものも可。
- 創作、摹刻とも応募は一人一点。

8月号 篆刻課題

〈原印コピー〉



◎出品方法

用紙の右側に押しし、左側に印影の釈文を明記 並びに落款(氏号)を入れる。

734号篆刻優秀作品

摹刻



特選 林 淳一
一点、一画、しっくりと原印観察をしている。完成度の高い作品である。

創作



特選 西川 翠嵐
確実な構成、運刀で作品の質を上げている。温和さのある印です。

選評 後藤 大峰

◎篆刻部総評

応募作品が全体に減少したのは大変残念です。その中で摹刻、創作共、各作者の特徴が表出した作品が多く見られました。(大峰評)

<p>(摹刻)</p> <p>特選 小中 林 淳一</p> <p>秀作(60音應) 大雲 小沢 華仙 遊雲 中川 研治 北日 成田 能喜</p> <p>佳作(60音應) 大綱 片岡 豪峰 小映 金谷 皓洋 文筆 関谷香代子</p> <p>入選(60音應) 芳琴 小野寺幸喜 丸山 加藤 妙子 大雲 鷺山 美梢 生大 高橋 美申 吉原 進</p> <p>(選外なし)</p>	<p>(創作)</p> <p>特選 墨宣 西川 翠嵐</p> <p>秀作(60音應) 石心 大沼 樵峰 四枝 塚本 清麗 やま 橋本 美翠 粹仙 藤井 龍仙</p> <p>佳作(60音應) 唯一 逢沢 唯一 水壑 伊澤 香山 慈空 坂本 義山 生大 中島 義則 富見 野木 紫蘭 宗苑 茂木 絢水</p> <p>入選(60音應) 遊雲 赤星 文華 游水 荒川 空華 声香 米倉 聲香</p> <p>(選外なし)</p>
--	---

昭和五十年一月二十七日第三種郵便物認可
令和四年七月二十五日 印刷
令和四年八月一日 発行

(毎月一回一日発行) 書道芸術 第七三六号

◎郵便物・清書・送金・一般事務等は

101-0031 東京都千代田区
東神田一―一六―一七
東神田プラザビル三階

公益財団法人 書道芸術院

電話(〇三)三八六二―一九五四
FAX(〇三)三八六二―一九五七

※お問い合わせ、ご連絡は、
月曜日～金曜日九時～十七時の間
をお願いします。(土日・祝日は休み)

コロナ禍の中、当分の間十時～
十六時に時間の変更しております。

送料

一か月の購読部数

- 1部 79円
- 2部 95円
- 3部 103円
- 4部 119円
- 5部 135円
- 6部 151円
- 7部 167円
- 8部 183円
- 9部 199円
- 10部以上は 送料免除

令和四年七月二十五日印刷
令和四年八月一日発行

定価 一部 七五〇円

編集兼 発行人 下谷 洋子

発行所 株式会社 リンクス
株式会社 小沢写真印刷株式会社

公益財団法人 書道芸術院

〒101-0031 東京都千代田区東神田一―一六―一七
電話(〇三)三八六二―一九五四
FAX(〇三)三八六二―一九五七

振替 〇〇一五〇四―一三〇五八
http://www.jins.co.jp/shogei/